

日本災害看護学会 令和6年能登半島地震・能登豪雨災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日:2024年10月17日(木)

活動隊員:藤田 さやか

1. 活動期間

2024年10月12日(土) 8時00分~17時00分

2024年10月13日(日) 8時30分~17時00分

2024年10月14日(月) 8時00分~12時00分

2. 活動場所

避難所:珠洲市立大谷小中学校(石川県珠洲市大谷町1字78番地)

4. 令和6年奥能登豪雨における石川県珠洲市の被害状況(10月9日 16:00時点 石川県庁情報)

人的被害 死者:3人 負傷者:軽症9人

住家被害:全壊5棟(その他調査中) 非住家被害:調査中

5. 避難所の状況

【避難者数】

5月12日:28人(うち2名は一時避難)

5月13日:28人(うち2名は一時避難)

5月14日:28人(うち2名は一時避難)

6. 支援活動の実際

【避難所環境整備】

学校側から本部に、渡り廊下の使用禁止のトイレに排泄物があるという情報提供があり、清掃をして封鎖をし直した(写真1)。

体育館前の駐車場は前週に水洗浄を実施したとのことだが、車や泥の付着した靴で出入りすることもあり、玄関・廊下の清掃を日々、複数回実施している状況である。避難所が開所してから、1.5階部分の、特に窓側の掃除が十分ではなく、害虫の死骸や粉塵の蓄積があった。2日間に分けて、マットレス下と窓格子の外の清掃を実施した(写真2)。使用していない布団類は、保管場所がなく1.5階部分に設置したままになっている。

避難所のトイレ掃除は、シルバー人材の派遣により実施されていたが、水害により職員が被災したとのことで派遣が中断している。そのため、午前・午後に1回ずつ、ハイターでの拭き取りと便器洗浄を実施した。

【避難者の健康管理】

連休ということもあり、活動時間中は避難所内に数名の滞在のみであった。定期的に血圧測定をしている方に測定の声かけをしたり、自己測定の測定値を確認したりした。聞き取りによると、避難所内外で咳嗽と咽頭痛症状を訴える避難者が複数名いた。粉塵吸入による症状の可能性もあるが、総合感冒薬

や漢方を服用している方もいるため、避難所内での感染リスクを鑑み、マスクの着用を促した。自宅避難者に一時的な発熱症状のあった方がいたが、総合感冒薬の内服で改善したとのことで、訪問には至っていない。

【地区巡回】

長橋地区・片岩地区・清水地区の巡回をしたが、片岩地区では、県道沿いにボランティアによる泥かき作業が一斉に実施されており、訪問対象者との面会はできなかった。1件、高齢独居世帯の方が、在住住所と異なる建物（納屋）で生活されていたが、今回面会できた親族が定期的に金沢から様子を見に来ており、体調面は問題ないとのことであった。

長橋地区では、土砂崩れにより道路が狭小している場所が多かった。1件の訪問対象者に面会でき、体調面は問題ないが、冬物の衣類のニーズがあることを聴取した。また、別世帯の独居親族が介護対象となったが、キーパーソンになることが不可能であることの相談があり、Kintoneを通して行政との情報共有をした。

【他団体との連携】

大谷地区にボランティアセンターのサテライト設置のニーズがあり、一部の地区長と個人ボランティアで準備を進めていたが、確認したところ社会福祉協議会との同意が得られていないことがわかったため、一度協議することを提案した。避難所運営本部においても、個人ボランティアの問い合わせが殺到していて対応に苦慮していること、サテライトは避難所とは別で設置した方が良いという意見があったため、本部長からお伝えいただいた。翌日に社会福祉協議会との協議が実現し、避難所外にボランティアセンターのサテライト機能を持つ資機材置き場を設置することで準備が進められた。避難所運営本部では、ボランティアの問い合わせがあった場合は対応せずに社会福祉協議会を通してもらうこと、ボランティアのトイレの使用は許可するが、資機材などの洗浄は許可しないこと、炊き出しやリラクゼーションなど避難所内でのボランティア以外の立ち入りは認めないことを取り決め、共有した。

活動期間を通して、事前に許可をされたアロママッサージ、カフェ、フラワーアレンジメント、炊き出しなどのボランティアの来所があった。地区巡回時にも広報をし、炊き出しのついでに立ち寄りの方が見られた。

7. 支援活動を通しての所感と課題

珠洲市内から大谷地区までの道路は依然整備されていないため、天候悪化時の土砂の流出が懸念される状態である。しかし、開通したことでボランティアの数が増えてきたため、避難所運営本部でのマネジメントの負担が見られる状態である。また、泥かきなど避難所外でのボランティアニーズの集約やボランティアのマネジメントをする人材がないため、長期的に地区に滞在している個人ボランティアと地区長が独自に実施している状況であった。外部からのボランティアが増えた場合に、社会福祉協議会との連携は必須であり、足並みを揃えるための協議を提案したことで、避難所運営本部との役割分担ができ、サテライトの設置準備が開始されたことを確認できた。今後はボランティアの安全管理・健康管理も課題と考えられる。避難所内でのイベントや炊き出し開催には、在宅避難者の外出機会にもつながるが、本部の負担にならないよう、自己完結での運営が求められる。

地区内の土砂が片付かないことで、泥の付着と乾燥が繰り返され、粉塵による呼吸障害の発症と、季節性感染症の同時発生が懸念される。避難所内でも生活空間と玄関との中間地帯は砂埃が貯留し、1日2回の掃除だけでは足りない状況である。長靴の泥汚れを玄関に入る前に洗浄できるようにしているが、水槽

を活用していない場合もあり、環境整備と個人個人への意識づけを強化していく必要がある。

参考：現地の様子



写真1（使用禁止トイレの清掃と再封鎖）



写真2（避難所の体育館1.5階部分の掃除）



避難所の玄関



フラワーアレンジメントボランティア（撮影・掲載許可あり）